

高等教育機関における野外教育の試み（2）

Outdoor Education in the Higher Education Institution : A Pilot Study (2)

粥 川 道 子 青 木 康 太 朗

Michiko KAYUKAWA Kotarou AOKI

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
第4号 2013

高等教育機関における野外教育の試み（2）

Outdoor Education in the Higher Education Institution : A Pilot Study（2）

粥 川 道 子¹⁾
Michiko KAYUKAWA

青 木 康 太 朗¹⁾
Kotarou AOKI

I. はじめに

高等教育機関である大学には、大学の建学の精神、教育の理念に沿って学生を育て、社会に送り出す使命がある。近年では、これに加え文部科学省が提示した「学士力」^{1) 2)}や経済産業省が提起する「社会人基礎力」³⁾が求められ、わが国の大学教育にとっては、社会や経済の発展に寄与できる豊かな教養と深い専門性を身につけた人材をいかに育成するかが大きな課題となっている。重ねて大学全入次時代となった今日では、大学教育を受ける前提となる基礎学力を補うリメディアル教育の必要性が生じている。従って多くの大学で、リメディアル教育によって学士力向上の基礎固めを行なうと共に、社会人基礎力を高めるキャリア教育の改革が進められている。

本研究では、「学士力」は、然るべき専門分野を軸とした学士課程教育全体で獲得されるべきものと考え、筆者らの専門領域である野外教育の視点から社会が求める人材育成に果たす教育課程を示すことを目的とした。なお、本研究は、「わが国の高等教育機関における野外教育の試み（1）」（2009年）の継続研究であり、北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科における野外教育の試みにつ

いて検証する。

II. 北翔大学における野外教育カリキュラムの変遷

北翔大学生涯学習システム学部健康プランニング学科は、2000年4月に健康・スポーツ系の学科として開設された。開設2年目には、野外教育関連科目2科目を正課として開講し、2006年の改組の際には、野外教育・レクリエーション分野を中心とした「アウトドア・マネジメントコース」を設置した。

当該コースのディプロマポリシーは、北海道の地域性を生かした自然体験活動やスポーツプログラムの企画・運営・評価法を身につけ、地域において人々の健康づくりを科学的に管理・指導できる専門家を育成することであった。コースは2009年3月まで続いた。

2010年4月に健康プランニング学科は発展的改組により生涯スポーツ学部となりスポーツ教育学科が開設された。改組の際、野外教育分野では、近年の大学教育に求められる人材育成に寄与すべく新学部での教育目標を「高等教育機関に学ぶ本学学生が、より良き社会人となるために主体的に全人的な成長を目指し、努力すること。そのために仲間や指導者である教員とともに学ぶ姿勢を育むこ

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

表1 生涯スポーツ学部と生涯システム学部の野外教育・レクリエーション系科目の新旧対照表

	生涯スポーツ学部スポーツ教育学科 (新)健康プランニングコース	生涯システム学部健康プランニング学科 (旧)アウトドア・マネジメントコース
講義	レジャー・レクリエーション論 (1年次) 野外教育論 (2年次) 必修 野外・レクリエーション指導論 (2年次) レクリエーションマネジメント (3年次) コ必	レジャー・レクリエーション論 (1年次) 必修 アウトドア・スポーツ論 (1年次) コ必 野外教育論 (2年次) キャンプカウンセリング (2年次) レクリエーションマネジメント (3年次)
実技 ・ 実習 ・ 演習	野外教育実習 (2年次) 教職必修 雪上活動実習 (2年次) レクリエーション実技 (2年次) 野外教育指導演習 (3年次) 地域支援実習 (2年次)	キャンプ実習 (1年次) 雪上活動実習 (2年次) レクリエーション実技 (2年次) アウトドアパズーツ (2年次) 野外教育指導実習 (3年次) アウトドア・マネジメント実習 (4年次) レクリエーション指導演習 (4年次)

() 内は対象学年・開講時期 必修は学科必修科目のこと コ必はコース必修科目のこと

と」⁴⁾と定めた。また、学部のカリキュラムポリシーと連動させて野外教育分野の全カリキュラムを検証した。そこで前学科のコース制では、野外教育分野の専門性の充実は図られたが、当該コース以外の学生が野外教育関連科目を履修しにくくなっていた状況を鑑み、アウトドア・マネジメントコースを廃止するとともに野外教育関連科目を12科目から9科目へとスリム化した。ただし、単にスリム化するのではなく、基本講義科目の「野外教育論」を学科必修に、基本実習科目の「野外教育実習」を教職必修とした。表1は、改組後の生涯スポーツ学部スポーツ教育学科健康プランニングコースと改組前の生涯学習システム学部健康プランニング学科アウトドア・マネジメントコースにおける野外教育・レクリエーション系分野科目の新旧対照表である。

「野外教育論」が必修科目になった要因は、「野外教育教の指導者に必要な自己分析力、組織の中での調整力、協調性、指導力あるいは企画力といった能力は、野外教育の専門家や教員に限らず社会人として必要な素養に繋がる。そのため生涯スポーツの指導者養成を目指すスポーツ教育学科において、野外教育

がもたらす教育的な効果は高い」と新学部設置準備室の学部教員に認められていたためである。

「野外教育実習」が教職必修科目となった要因は、「2008年3月公示の新学習指導要領において自然体験活動の充実が強く打ち出されたが、実際には教員の野外教育や自然体験活動に関する専門知識は圧倒的に不足している。野外教育は全ての教科に関連しえるひとつの教育の方法であることから教員養成課程に野外教育関連科目、特に体験学習の特徴をもつ実習を必修化することで指導力のある教員を育成できる」と教職科目担当の学部教員に認識されていたためである。北翔大学生涯スポーツ学部の教職科目を文部科学省に申請した際の課程認定申請書には、教職必修とした「野外教育実習」を特色ある科目として特記している。

Ⅲ. 生涯スポーツ学部の野外教育カリキュラムと自然体験指導者養成のプロセス

現在、わが国には野外教育分野を体系的に学べる大学として筑波大学をはじめ信州大学

教育学部生涯スポーツ課程野外教育専攻、びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部生涯スポーツ学科野外スポーツコース、北海道教育大学岩見沢校スポーツ教育コースなどがある。

また、近年は野外教育・レクリエーション分野を専門とする大学教員が、自らの専門性を活かしてゼミナールや関連科目を担当し野外教育を学生に教授している。しかし、後者の場合、野外教育科目が学部学科の教育課程に体系的に組み込まれている大学は、然程多いとはいえない状況である。

北翔大学の場合、前者の大学のような野外教育専門コースであるアウトドア・マネジメントコースを解体し、専門科目のスリム化を行ないつつも、専門分野基礎理論の必修化と自然体験学習の教職必修化を行なうことで、教員志望学生に野外教育ならびに自然体験活動の理論と実際を学ぶ機会を構築した。

北翔大学生涯スポーツ学部の野外教育カリキュラムは、自然体験指導者養成のプロセスと連動し、表1で示したスポーツ教育学科開講の野外教育・レクリエーション系科目のほか、野外教育分野の専任教員が指導する専門演習と卒業研究の2科目を含む教育課程ならびに北翔大学野外教育研究会（以下、野外教育研究会）の活動、北翔大学北方圏生涯スポーツセンター研究活動、外部団体との連携活動から構成されている（図1）。従って、北翔大学の自然体験指導者養成は学部学科の教育課程のみで構成されているわけではない。しかしながら自然体験指導者養成課程における初期段階に、学部学科教育課程の野外教育関連科目を体系的に組み込んだ事に、大きな意義があると考えられる。

例えば、野外教育に関する基礎科目を必修化したことによる高等教育機関としての自然

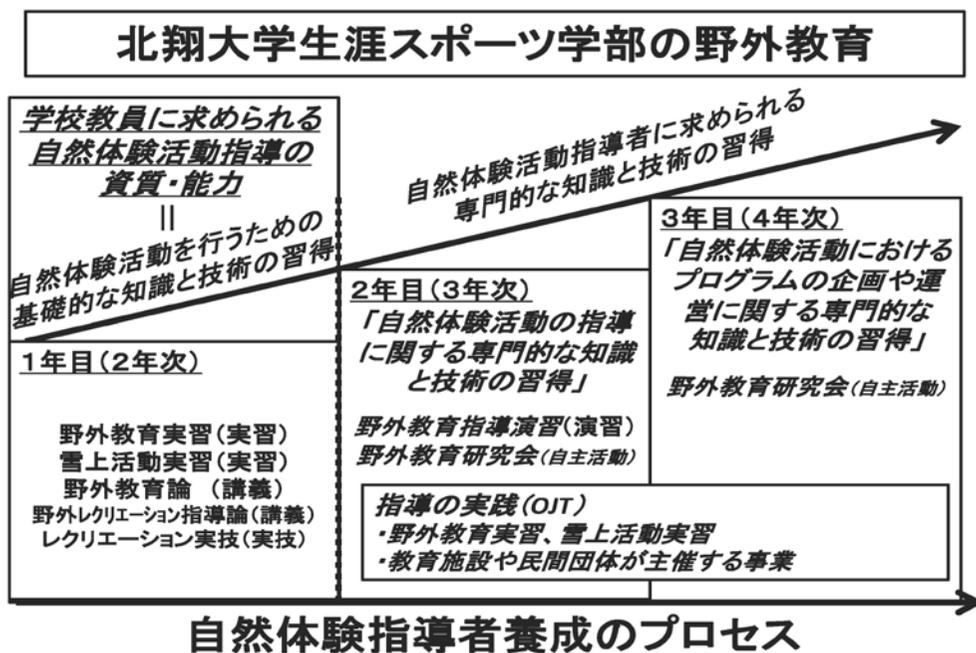


図1 北翔大学の野外教育カリキュラムと自然体験指導者養成のプロセス

体験指導者養成の数的拡大は、その一つである。スポーツ教育学科には、各学年約200名の学生が在籍しているが、この学生数は改組前と変わっていない。しかし「野外教育論」の履修者数は改組前8年間の平均が25名であったのに対し、改組後2年間の平均は200名となり8倍となった。「野外教育実習」の実習参加者は改組前4年間の平均32名に対し改組後3年間の平均は132名で4倍強となった。

これまでに説明してきた「野外教育論」(写真1)と「野外教育実習」(写真2)は、生涯スポーツ学部スポーツ教育学科2年次対象科目である。2年次ではその他に基礎指導理論となる「野外レクリエーション指導論」、



写真1 必修科目「野外教育論」FD公開授業履修者200名の講義に机間巡視は欠かせない

基礎指導実技の「レクリエーション実技」(写真3)雪上での自然活動体験となる「雪上活動実習」(写真4)の5科目を開講している。いずれの科目も履修者が改組前に比べ大幅に増加している。さらに自然体験指導者養成課程として2年目開講の「野外教育指導演習」についても、改組前4年間の平均4.5名に対し改組後2年間の平均は14名で約3倍である。

先に意義としてあげた自然体験指導者養成の数的拡大はすなわち野外教育科目の履修数の増加である。これは、多くの学生が野外教育の理念や現代社会における野外教育の役割等を学び、その専門性に触れたことを意味す

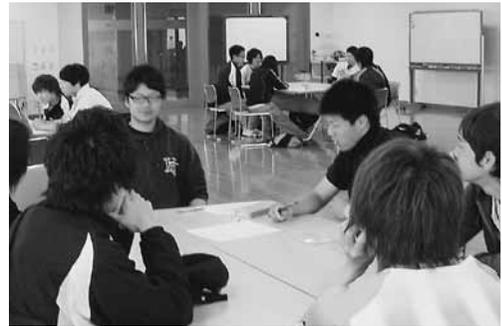


写真3 選択科目「レクリエーション実技」自分たちで野外レクリエーションゲームを企画する履修生



写真2 教職必修科目「野外教育実習」仲間と協力して課題解決型ゲームに挑戦する履修生



写真4 選択科目「雪上活動実習」先輩たちが企画した雪中運動会を雪まみれで楽しむ履修生

る。履修者数の増加が、そのまま質の高い自然体験活動指導者養成に繋がる訳ではない。しかし、多くの学生が野外教育関連科目を履修することにより、多様な価値観をもつ学生が互いに学び合い、より質の高い人材育成の可能もまた生まれるのではないかと筆者らは捉えている。また、「野外教育指導演習」の履修者全員が自然体験活動指導者や野外教育の専門家を目指すわけではない。しかし、大学の教育課程の早い時期に野外教育に触れ、野外教育の特徴である学習者が最も活発に学ぶことにより、その後の学生自身の大学での学びに主体性が生まれるのではないかと促している。さらに全人的な成長を目指し、仲間や指導者である教員とともに学ぶ姿勢が育まれると考える。

IV. 教職必修としての野外教育実習

北翔大学の自然体験指導者養成課程の1年目の目標は、「自然体験活動に関する基礎的な知識と技術の習得」である。同時にこれらは「学校教員に求められる自然体験活動の指導の資質・能力の醸成を目指し、質の高い教員養成」に繋がるものとして捉えている。そのため、学科必修の「野外教育論」と教職課程の保健体育の教科に関する必修科目とした「野外教育実習」の両科目を連動させ、より教育的な効果を目指したカリキュラムを構築した。具体的には、学生に野外教育論において基礎理論を15回教授し、これと並行して野外教育実習の学内講義を4回行なう。この学内講義では「野外教育論」の内容と並行させつつ、学校教育と野外教育の関連事項ならびに安全教育について重点的に教授し、その後

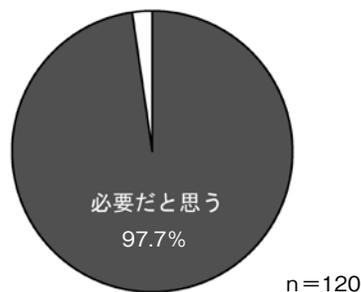


図2 教員養成課程における自然体験活動の必要性

3泊4日の学外実習として組織キャンプの体験学習を行なう。学生は、実習後野外教育論を復習し、野外教育実習の自らの自然体験と理論を整理して、レポート提出を行うという流れをつくった。

「野外教育論」と「野外教育実習」を履修した教職志望学生を対象に筆者らが2011年に行った研究⁵⁾では、教員養成課程における自然体験活動の必要性について、「必要だと思う」(「必要だと思う」+「どちらかというとも必要だと思う」)と回答した教職志望学生は97.7%となっており、ほぼ全員が教員養成課程において自然体験活動が必要だと感じていることが明らかになった(図2)。

その理由について、なぜ教員養成課程に自然体験活動が必要だと思うのか尋ねたところ、「教員になった際、野外活動の経験が不足だと生徒達に指導することができないと思うから。」や「生徒と良い人間関係を築くためには学ぶ側の気持ちを理解していないといけないと思うので、教員になるうえで両方の気持ちを知ることが大切だと思ったから。」といった将来の生徒指導に関する意見が多数挙げられていた。また、「自然という非日常的な環境で自分のことを見つめ直すことで、自分の持っていた良い部分や知らな

かった一面を見つけることができたから。], 「普段できないことを実習で経験することで、今までより考える視野が広がったから。」といった自分自身の成長に関する意見も見られた。その他にも、「カウンセラーの姿を見ていたら、自分もいつかは教える側に立つのだという意識が高まり、教員を目指していく上で大切な感情を学ぶことができたから。」といった教員を志すためのモチベーションに関する意見も見られた。

また、キャンプ体験（野外教育実習）の中で教員になるうえで役立つと思ったことの有無については、「ある」と回答した教職志望学生は97.7%となっており、ほぼ全員がキャンプ体験は教員になるうえで役立つと感じていることが分かった。役立つと思った具体的な理由は、「様々な人とコミュニケーションを取ったり、危険を予知して安全に活動できるように意識したりすることは、教員が生徒を指導する時に大切だと思った。], 「自分が教員という立場として答えを言うのではなく、ちょっとしたキッカケを与え、班員のみみんなで考えさせたりすることが役立つなと思った。], 「教えるばかりでなく、気づかせる指導も重要であると思った。], 「ASEのようなことを取り入れると生徒同士のコミュニケーションが高まり、普段の授業でも楽しく授業ができると思った。], 「キャンプで料理をする際、火をつけたり、料理を作ったりすることを教えられるようになったと思った。」など指導法に関する学びについての意見が多くあげられていた。その他、自然体験活動指導の指導力の変容や資質・能力の変容を測った結果からは、「教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の

指導力を向上させる効果や教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があることが明らかになった」⁶⁾

V. 「野外教育指導演習」の展開方法

自然体験活動指導者養成課程の1年目の教育課程については、Ⅲ章に示した通りである。V章では、指導者養成課程の2年目開講の「野外教育指導演習」について述べる。

「野外教育指導演習」は、指導体験の場として、3年生を対象とした演習科目である。原則、2年生開講の野外教育・レクリエーション系科目5科目のうち4科目の単位を取得した学生へ履修を許可している。「野外教育指導演習」の履修者は、「野外教育実習」の学生スタッフとしてカウンセラーやプログラムスタッフとなり企画・運営指導・評価を体験する。これを現地実習と呼んでいる。授業は学内講義、学内演習、実地踏査、現地実習で構成した。例えば学内演習では、履修者同士でゲーム指導を行ない、指導者・受講者・評価者にわかれ、互いに指導内容を評価する。表2は、学内演習で使用する筆者らが作成した「指導トレーニング用評価表」である。このような学内演習や講義、実地踏査による現地トレーニングを行った後、現地実習前の10日間程を企画会議や備品の点検整備、食料の買い出し等の準備にあてている。現地実習は、3泊4日の「野外教育実習」を2展開とそのための設営準備に2日間をかけるため9泊10日で行なわれる。また、1展開毎に学生スタッフの役割を変え、自然体験指導者としての教育・管理部門をそれぞれ体験できるようにし

表2 「指導トレーニング」 評価シート

学号番号() 氏名()	
「野外教育指導演習」	
「指導トレーニング」評価シート	
【課 題】(ジャンケンでアイスブレイキング・バケツボール・雑音天国ゲーム・私は誰でしょう)	
【評 価】良くできている(3点)・特に問題ない(2点)・改善が必要(1点)	
説明書	点/10点
1. 聞き取りやすい声の大きさ、スピードで話ができているか	5・4・3・2・1
2. 簡単な説明や適切な質問ができてきているか	5・4・3・2・1
3. 参加者の表情を確認するなど目配りができているか	5・4・3・2・1
4. ジェスチャーなど分かりやすい動きのある表現ができているか	5・4・3・2・1
5. 参加者が集中して話を聞ける位置に立っているか	5・4・3・2・1
6. 指導者が残やすい、話が聞かやすい位置に参加者を配置しているか	5・4・3・2・1
チームワーク	点/10点
7. 説明する人、フォローする人、盛り上げる人といった役割分担ができているか	5・4・3・2・1
8. 指導者が適切に配座(回まわらないなど)できているか	5・4・3・2・1
説明・準備	点/20点
9. 活動に使う物や活動を行う場所について分かりやすく説明できているか	5・4・3・2・1
10. 活動の流れ(時間)について分かりやすく説明できているか	5・4・3・2・1
11. 分かりやすく説明するための工夫(指示、資料、見本等)をしているか	5・4・3・2・1
12. 活動に必要な用具の準備、場所の確保等が適切にできているか	5・4・3・2・1
参加者が楽しめる、盛り上げるための工夫	点/10点
13. 内容を理解できていない参加者に対してフォローができているか	5・4・3・2・1
14. ゲームがうまく進まない時、進行を促すような工夫や配慮ができているか	5・4・3・2・1
安全上の配慮	点/15点
15. 危険な物や場所、行為等について事前に説明しているか	5・4・3・2・1
16. 活動中、参加者の安全を確保するための目配り、声掛け等ができているか	5・4・3・2・1
17. 危険な箇所に参加者を配置しているか	5・4・3・2・1
進行・まとめ	点/15点
18. ゲームがスムーズに進行できるような動きの良く説明できているか	5・4・3・2・1
19. ゲームのねらいや趣意も参加者にうまく伝えることができているか	5・4・3・2・1
20. 振り返りの時間の確保や参加者に対するフィードバックができているか	5・4・3・2・1
計	点/100点
【コメント】	
良かった点	改善すべき点

ている。

このように学生にとっては通常の授業時間より長い「野外教育指導演習」であるが履修者は、先に示したとおり改組前の約4倍となり、2011年度が13名、2012年度は15名と増えている。指導体験科目の履修者の増加の要因は、Ⅲ章でも述べたとおり野外教育に関する基礎科目の必修化と2年次に複数の野外教育科目を連動させて開講したことにより、多くの学生が野外教育を知り、興味をもったためであると思われる。また、実際の「野外教育実習」後の学生レポートでは、「来年、後輩にも同じ思いをしてもらいたいと思うのでカウンセラーをやる。キャンパーをやってこれだけ得るものがあつたのがあつたのだから、カウンセラー側でも得るものがあると思う。」「来年は自分が学生スタッフとなり、

この経験を伝えていきたい。」「指導法や野外活動に必要な知識等はまだまだ未熟ですが、来年はカウンセラーをしてみたいと思います。」との記述が多くみられた。これらのことから、自然体験指導者という明確な目標ではないが、カウンセラーやスタッフである先輩学生の活動にふれ、自らも何かを得るために履修する学生が多いのではないかと考えられる。一方で筆者らの2011年の研究では、「カウンセラーやスタッフのアドバイスを聞いて、このように言ったら生徒達が考えやすいのだということが勉強になった。」「スタッフを見て、スケジュールやゲームの内容など何か説明をする際に分かりやすく話せることが大事だと思った。」「もし自分がカウンセラーだったらと考えながら班のメンバーの個性や行動を見ていたら、一人ひとりの良い部分が見えてきた。こういう”目”は、教員になった時にとっても役立つと思った。」⁷⁾などカウンセラーやスタッフから学んだことを多数挙げ、教員志望学生が更なる教員力を磨くためという明確な目標をもって「野外教育指導演習」を履修する学生もいることも明らかになっている。

Ⅵ. 研究機関としての試み

1. 野外教育研究会と野外教育指導演習

「野外教育研究会」は、2004年に結成された。初期の野外教育研究会は「学術フロンティア推進事業」(2004年度～2009年度)に基づく「体験活動研究分野」で、同研究員の野外教育担当教員と学生で構成された。「野外教育研究会」では、日常の「勉強会」と夏季や冬季の「実践トレーニング」を融合させた活動

表3 2011年度野外教育研究会年間活動内容

月 日	内 容
4月19日 26日	キャンパインストラクター養成 講習・特別講義・資格試験(学内)
7月18日	BUC(プロジェクトワイルド)(学内)
7月31日	大学祭(アウトドアコーナー)(学内)
8月上旬	青少年教育施設, 青少年団体等での実 地研修(2泊3日を1回以上)
8月 9日 ~11日	野外教育実習実地踏査 (国立日高青少年自然の家)
9月 5日 ~14日	野外教育実習 (国立日高青少年自然の家)
11月11日	野外教育実習評価会(学内)
12月25日 ~27日	雪上活動実習実地踏査 (国立大雪青少年交流の家)
1月28日	恵庭市教育委員会「雪の森を歩こう」
2月19日 ~20日	冬季自然体験活動の指導トレーニング 実習(国立日高青少年自然の家)
2月23日 ~27日	雪上活動実習 (国立大雪青少年交流の家)

*公益社団法人日本キャンプ協会と北翔大学の教育課程について

1. 北翔大学は, 日本キャンプ協会のキャンパインストラクター, キャンプディレクター2級マネジメントディレクターの課程認定校(団体B)である。
2. 活動内容に記載したBUC(ブラッシュアップ&コミュニケーション)とは, 日本キャンプ協会の有資格者が互いの技能と交流を図る機会である。
3. スポーツ教育学科1期生(2012年度卒業)の資格取得者は, キャンパインストラクター32名, キャンプディレクター2級マネジメントディレクター9名。

を通した指導者養成システムづくりを試行した。2010年度からは, 「北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター」の新研究プロジェクト「健康スポーツ研究分野」で「野外教育研究会」を再編成し, 新たな指導者養成システムづくりを試行している。

構成員としては, 教員と学生の他に, 在学中に「野外教育研究会」に所属していた卒業生の有志と大学院教育課程の「生涯スポーツ特別演習(野外教育)」を履修した大学院生を加えた。表3・表4は, 2011年度と2012年度の「野外教育研究会」の活動内容である。

「野外教育研究会」には, 「野外教育指導演

表4 2012年度野外教育研究会年間活動内容

月 日	内 容
4月18日 25日	キャンパインストラクター養成 講習・特別講義・資格試験(学内)
7月 7日	鷹栖町教育委員会デイキャンプ (パレットヒルズ)
7月14日	BUC(アクティビティの企画と指導を 学ぼう!)(学内)
8月 4日	大学祭(アウトドアコーナー)(学内)
8月上旬	青少年教育施設, 青少年団体等での実 地研修(2泊3日を1回以上)
8月 9日 ~11日	野外教育実習実地踏査 (国立日高青少年自然の家)
8月20日	ちびっこスポーツ教室 (上江別小学校)
9月 5日 ~14日	野外教育実習 (国立日高青少年自然の家)
10月14日	まる元「スマイル・ウォーク」 (エルム高原家族旅行村)
10月29日	野外教育実習評価会(学内)
12月25日 ~27日	雪上活動実習実地踏査 (国立大雪青少年交流の家)
2月 2日	スポルクラブ「スノーシューハイク」 (野幌森林公園)
2月 9日	恵庭市教育委員会「雪の森を歩こう」 (野幌森林公園)
2月23日 ~27日	雪上活動実習 (国立大雪青少年交流の家)

*2011年度・21012年度8月上旬の実地研修(OJT)先は, 国立日高青少年自然の家, 国立大雪青少年交流の家, 北海道YMCA, 自然教育促進会等である。

習]履修生が優先的に所属できるようにした。所属期間は特に規定せず, 「野外教育指導演習」の単位取得後も希望者は, 自主的に「野外教育実習」, 「雪上活動実習」, 「野外教育指導演習」の学生スタッフとして活動し, プログラムの企画や運営に関する専門的な知識と技術の向上を目指せるようにした。また, 学生同士の学び合いを重視した。特に毎年2月に実施される「雪上活動実習」では, プログラムの企画運営の大半を4年生が行ない, 3年生へ指示を出し発信力や働きかけ力, 計画力等のいわゆる社会人基礎力を高めている。卒業時には, その年度の「野外教育実習」の

評価をまとめて50頁ほどの「野外教実習報告書」を編纂し、発行している。本報告書は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北海道型スポーツ振興システムの構築」の助成を受けて作成し、関係機関へ配布している。野外教育研究会の活動は、以上のような教育課程内の活動に留まらず地域の青少年施設や青少年団体の主催事業、教育委員会等のイベントで指導運営に携わり指導力の向上に努めている。これら指導実践の機会を積極的に取り入れることで、学生は多世代を対象とした多様な指導場面を体験し、大学の講義や教員の指導とは異なる環境での活動を通して、同じ自然体験活動の指導であっても多様な方法があることを学ぶとともに、指導者として求められる資質は、原則変わらないことを体験的に学ぶことができると考えている。次に、「北方圏生涯スポーツ研究センター」内の他分野と連携することによる自然体験活動指導者養成の指導実践について述べる。

2. 野外教育研究会とスマイル・ウォーク

健康スポーツ研究分野では、2011年からコープさっぽろ、北翔大学、小樽商科大学大学院ビジネススクール、赤平市でつくる産学官連携共同プロジェクト「あかびら・地域まるごと元気アッププログラム」(以下、「まる元プログラム」)に取り組んでいる。また、他の研究分野が運営する総合型地域スポーツクラブ「スポルクラブ」と連携している。

いずれも研究機関として日常生活に密着した自然体験活動を地域住民に提供している。その一方で「野外教育研究会」の学生が、自然体験活動の企画・運営等に関する指導経験を積む機会としてこれらを機能させている。



写真5 「スマイル・ウォーク」自ら作成したゲームを運営指導する学生たち

「まる元プログラム」では、「健康スポーツ研究分野」の研究者とともに赤平市の高齢者を対象に2012年10月に自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」を企画し、「野外教育研究会」の学生が、プログラムの全体進行やゲーム指導(写真5)を行なった。

「スポルクラブ」では、2013年2月に大学から徒歩10分にある約2051haの広大な原生林「野幌森林公園」をフィールドに、「スノーシューハイキング」を地域の方へ指導した。学生は、実践的なプログラムの企画・運営指導と多世代の参加者との交流をとおして、実地トレーニングならではの柔軟性や状況把握力を身につけているのではないかと考える。

Ⅶ. おわりに

本研究では、大学教育に学士力や社会人基礎力の育成が求められる中、野外教育の視点から北翔大学の野外教育カリキュラムと自然体験指導者養成の試みを提示した。本論で示した「野外教育実習」で、キャンプ体験をした学生を対象に行なった2011年の調査では、「①キャンプ体験は、前に踏み出す力(アクション)の主体性と実行力、考え抜く力(シンキ

ング)の計画力と創造力,チームで働く力(チームワーク)の発信力と傾聴力,状況把握力等の社会人基礎力を構成する一部の能力に教育効果がある。②キャンプ体験によって向上した社会人基礎力のうち,日常生活でも生かせる能力は向上効果が持続しやすい。」⁸⁾との結果を得,大学教育の実習として行うキャンプ体験が,社会人基礎力や学士力における汎用技能や一部の志向性の育成手段として有意性があることが明らかになった。続く2012年に「野外教育実習」でキャンプ体験をした教員志望学生を対象に行なった調査では,「教員養成課程におけるキャンプ体験は,教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があり,教員が自然体験活動を指導するためには,計画どおりに進まなかった際の判断力や状況の変化を予見する能力が必要だと感じている教職志望学生が多かった。」⁹⁾との結果を得た。また,「野外教育実習」では,「野外教育指導演習」の履修生を含む学生スタッフの存在が,参加学生の気づきに大きな影響を及ぼしている点が明らかになった。今後は,教育課程に体系的に組み込まれた「野外教育指導演習」での指導力の向上要因について検証をしていくことが必要だと考える。現時点では,指導力向上要因の測定項目を探っている段階であるが,教育的効果を正しく測定できれば,大学の教育課程において体系的に野外教育科目を置くことにより,「獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し,創造的思考力が求められる学士力」や「アクション・シンキング・チームワークが求められる社会人基礎力」の醸成と向上に寄与することが証明できるのではないかと捉えている。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2008)教育振興基本計画
- 2) 文部科学省(2008)中長期的な大学教育の在り方について(諮問)
- 3) 経済産業省(2007)「社会人基礎力」成果のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～
- 4) 粥川道子,山田亮,高等教育機関における野外教育の試み(1),北翔大学生涯スポーツ学部創刊号,pp7I-82,2010.3
- 5) 青木 康太朗,粥川道子,キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響,北翔大学北方圏スポーツ研究センター年報 第3号 pp.21-28 2012.10
- 6) 前載書5),p28
- 7) 青木 康太朗,粥川道子,キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究,北翔大学 生涯スポーツ学部研究紀要 第3号 pp.27-39 2012.3
- 8) 前載書7),p.39
- 9) 前載書5),p.28

付 記

本研究は,私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北海道型スポーツ振興システムの構築」(H23～H25)の助成を受けて実施した。